【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和６年度学校評価 結果・学校関係者評価

達成度（評価）
Ａ：十分達成できている
Ｂ：おおむね達成できている
Ｃ：やや不十分である
Ｄ：不十分である

学校名	佐賀市立諸富北小学校

1　前年度 評価結果の概要	・学力向上については、国語科中心から他教科へ広げた「授業づくり」について研究を進めることができ、児童の学習意欲や学力向上へとつながった。しかし、自分の考えを表現（説明）することや説明的文章の読解や基礎的内容の活用に課題がある。自分の考えの根拠を明らかにしてまとめたり、自信をもって意見を表現したりできる指導法の工夫に取り組んでいきたい。 ・心の教育では、研修会や全校人権教室を実施し、組織的に取り組み、いじめや人権への意識の向上につながった。良好な人間関係を構築させるために、道徳や特別活動の充実、相互のコミュニケーション力を高める取り組みを今後も継続していきたい。 ・地域、保護者との連携については、学校と地域や保護者と連携して、子どもの安全・安心を守ることに取り組むことができた。学校評価アンケートではほとんどの項目で中間評価を上回ることができ、特に「いじめのない学校づくり」については100%の評価をいただいた。学校からの情報発信を工夫して関心を高め、保護者への啓発を より一層進めていきたい。 ・働き方改革については、職員の「タイムマネジメント」研修を継続して行うとともに、様々な学校行事の統廃合やデータの整理及び有効活用を進めていくことで、実務的な業務改善を行っていきたい。
2　学校教育目標	**夢をもち　ふるさとを大切に思う児童の育成** **いい顔であいさつをする子ども　　いい声をひびかせる子ども　　いい心をひろげる子ども**
3　本年度の重点目標	①「学力向上」　校内研究の充実と授業改善　基礎基本の定着と家庭学習の充実　学習用端末の効果的な利用を目指した授業づくり　読書習慣の定着 ②「豊かな心の育成」　一人一人を認める出番づくり　支え合う学級づくり　いじめ、差別の防止 ③「特別支援教育」　一人一人の特性を理解した支援　将来の自立と社会参加 ④「地域連携」　諸富中学校区学校運営協議会の活性化　地域の教育力と学習界の活用　地域を中心とした学校との共催事業への取組 ⑤「業務の効率化」　業務改善の意識の向上　健康管理とワークライフバランス

4　重点取組内容・成果指標　　中間評価　　5　最終評価

（1）共通評価項目

重点取組			具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価	
評価項目	取組内容	成果指標 （数値目標）		進捗度 （評価）	進捗状況と見通し	達成度 （評価）	実施結果	評価	意見や提言
●学力の向上	○全職員による共通理解と共通実践。 ○学習内容の定着に向けた、分かりやすい授業の実践。 ○家庭学習の充実	○学習課題、一人一台タブレット端末の活用、UDを意識した授業づくりに取り組む職員100%。 ○該当学年の家庭学習の時間の目安を達成する児童80%。	・「授業づくりのステップ1・2・3」や視覚化ボード、一人一台タブレット端末を活用した授業実践。 ・毎月チェックカードを使って家庭学習の時間を振り返る機会を設ける。基礎・基本の定着のため、復習の書を用意し家庭学習を促進する。	B	・学習課題、UDを意識した授業づくりに取り組むことができたと肯定的に回答した職員は100%だった。タブレットは、必要に応じて活用することができていた。 ・該当学年の家庭学習の時間の目安を達成したと答えた児童は、96%だったが、保護者の回答は75%だった。引き続き、毎月のチェックカードを使って、家庭学習の時間を振り返る機会を設けるとともに、子どもたちと保護者への呼びかけを続けていく。また。復習の書を家庭学習で活用できるように呼び掛けていく。	B	・校内研究のテーマである学習課題を意識しながら全職員が研究授業を終えることができた。タブレットの活用の仕方についても職員間で情報交換ができた。 ・該当学年の家庭学習の時間の目安を達成したと答えた児童・保護者の割合は中間評価と比べると、あまり変化がなかった。引き続き、家庭学習の重要性を学力向上だより や学級通信で知らせていく必要がある。	B	・児童、保護者、職員のアンケート結果の「だいたい」がもう少し少なくなればよいと思う。 ・タブレットの活用に関しては、職員だけでなく児童アンケートがあってもよかった。 ・「自分の考えを発表しようとする。」の児童アンケートはその手立ても含めて職員のアンケートにも反映すべきだと思う。 ・学年によって、保護者アンケートに差があるところは改善したい。 ・家庭学習にタブレットを活用するのは難しいのか。
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○心を育てる教育に関するアンケートにおいて肯定的な回答をした児童が90%以上になる。 ○道徳教育や人権教育に関するアンケートにおいて、肯定的な回答をした保護者が90%以上になる。	・一人ひとりを大切にする人権教室（年間3回）と「いじめ・命に関するアンケート（毎月）」を適切に実施する。 ・友達に温かな言葉を書きあう「ハートタイム」を定期的（隔月）に実施する。 ・道徳科の授業づくりやエンカウンターに関する行内研修等を年間1回以上実施する。	A	・前期の間に全校統一しての人権教室を2回行い、「いじめ・命に関するアンケート」を毎月実施することができている。 ・「ハートタイム」で「ぽかぽかカード」を記入し、友達の良さを見つけ、互いに認める雰囲気作りに繋がった。 ・夏季休業中に道徳の研修会を行った。学級経営や、道徳の授業作りに役立っている。	A	・児童アンケート、保護者アンケート、職員アンケートのすべてにおいて、成果指標を上回った。 ・後期も人権教室を行い、全校で続一した時間に人権に関する授業を行った。「いじめ・命に関するアンケート」や「ぽかぽかカード」の取り組みも、継続して実施することができている。 ・冬季休業中も、道徳の授業づくりや学級経営に関する研修会を行った。	A	・児童アンケートに「友だちを大切に思って、声かけをしていますか。」という項目があってもよいのではないか。 ・学校へ来ることが まったく楽しくないと答えた児童への対応はどうなっているのだろうか。 ・児童が学校へ来ることが楽しいと全員が思える学校づくりに努めてほしい。なぜ「あまり」や「まったく」の回答の理由が聞きたい。
	●◎いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○いじめ防止等（いじめの定義、いじめの防止等のための取組、事案対処等）について組織的対応ができていると回答した教師が90%以上となる。 ○いじめのない学校づくりへの取組に関するアンケートにおいて、肯定的な回答をした保護者が90%以上となる。	・全職員による生徒指導協議会を毎月実施し、いじめや不登校、気になる児童への対応をチームとして組織的に行う。 ・毎月の児童アンケート、年間1回以上の保護者アンケートを実施する。 ・児童と担任による個人面談を計画的に年間2回以上実施する。	B	・毎月児童アンケートを実施し、児童と担任による個人面談（前期分）を1回実施することができた。また、毎月の児童アンケートを実施し、児童の悩み等に早期に対応することができている。 ・全職員による生徒指導協議会を毎月実施し、いじめや不登校、気になる児童への対応をチームとして組織的に行うことができている。今後も継続した指導や保護者との連携に努めていきたい。	A	・学校評価アンケートにおいて100%の職員がいじめの早期発見・早期対応に向け子どもの様子の把握や指導に取り組み、組織として対応することができた。」と回答した。保護者の91%が「学校はいじめのない学校にするために思いやりや友だち づくりの指導に取り組んでいる。」と回答した。99%の児童が「けんかやいじわるをしないで、友達と仲良くできている。」と回答した。今後も継続した指導や保護者との連携に努め、全職員で組織的に対応していきたい。	A	・いじめは絶対あってはならないことだが、大人の教育も大事なのではないかと思う。授業参観等で親と子が一生学習できる機会があればよいと思う。 ・「まったく」と 答えたところへの対応をしていきたい。
	●児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。	●「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童生徒が90%以上になる。 ●◎「将来の夢や目標をもっている」について肯定的な回答をした児童生徒が75%以上になる。 ○Q-Uアンケートの分析結果を生かした学級経営を行っていると回答した職員が90%以上になる。	・2か月に1回の「ぽかぽかカード」（児童の良さ見つけカード）の取り組みで、良い行動の共有・称賛を図り、児童の自尊感情を高める。 ・年間を通じて、道徳等で自分の夢や希望について考える授業を積極的に行う。 ・学級活動や各種体験活動において、活動の見通しを自分たちで考えたり、実際の活動や振り返りなどを主体的に取り組ませたりして、自分の成長を児童自身が自覚できる活動を仕組む。	A	・「ぽかぽかカード」を記入し、児童相互の自尊感情を高めることに繋がった。また、掲示をすることで、他の児童のカードを見ることができ、自分では気付くことができなかった友達の良さを知ることができた。 ・パラリンピック代表の選手のお話を聞いたことが、将来の自分の夢について具体的に考える良い機会になっていた。	A	・児童アンケート、保護者アンケート、職員アンケートのすべてにおいて、成果指標を上回った。 ・「ぽかぽかカード」については、後期も実施したものを掲示している。 ・Q-Uアンケートを実施した後、3学期の学級経営に生かすことができるよう、全職員で分析のしかたに関する研修を行った。デジタル化され、実施時期が例年よりも遅かったが、2回目のアンケートも全校で実施を予定している。	A	・保護者アンケートを取り入れてもよいと思う。 ・時間が限られているなかで人権教育、道徳教育を各学級で実践できている。
●健康・体つくり	●望ましい生活習慣の形成	○食育や健康教育への取組に関するアンケートにおいて肯定的な回答をした保護者が90%以上になる。 ○ゲームやテレビ、インターネットなど家庭で決めた時間を守れていることに関するアンケートにおいて、肯定的な回答をした保護者が80%以上になる。	・学級活動において、栄養教諭による食育授業を実施し、「早寝、早起き、朝ご飯」の意識を高め、定期的に実践を振り返り、生活時間と食事のとり方の改善を行う。 ・給食において適正量の配膳を行い、残菜を減らす意識を高め習慣づけを行う。 ・毎月1日の「ノーテレビ・ノーゲーム・ノースマホデー」を定着させ、自主的計画的に規則正しい生活を送る実践力を高める。	B	・食育や健康教育への取り組みに対するアンケートにおいて肯定的な回答をした保護者の割合が98%だった。 ・ゲームやテレビ、インターネットなど家庭で決めた時間を守れていることに関するアンケートにおいて肯定的な回答をした保護者の割合は72%であった。また、児童の肯定的な回答率については91%となっており、保護者と児童との間の認識に差があることが分かった。今後は、低・中・高のそれぞれで行える取り組みを考え、各学年部での呼びかけを行っていく。	B	・食育や健康教育への取り組みに対するアンケートにおいて肯定的な回答をした保護者の割合が100%だった。 ・ゲームやテレビ、インターネットなど家庭で決めた時間を守れていることに関するアンケートにおいて肯定的な回答をした保護者は64%、児童は97%であった。児童の回答数は222人、保護者の回答者数は109人ということで、聞きがあった。 ・アンケートの質問の文言について10「用事がなない人はルールを守って外遊び」、11、「9時以降触らないというルールを守って」という修正のアイデアが出た。	B	・家庭での教育が主になってくると思うが、保護者に話し続けていくことが必要ではないかと思う。 ・児童アンケート「給食を残さない。」「外で遊ぶ。」に対応した教師用アンケートがはっきりしていないので、文言を変えるか指導をはっきりさせるか検討してほしい。 ・ゲーム、テレビ、インターネットの活用については、家庭の意識を変える必要もある。PTAや諸中、諸南とも連携して取り組むことがあれば、協力したい。
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。 （月45時間、年間360時間） ○職員の業務改善に対する意識や実行力を高めるための研修を年間に2回以上実施する。	・毎週金曜日の定時退勤日の確実な実施に努める。 ・退勤時刻の上限を設定し、退勤時刻までの時間を個人で勤案して効率的に活用する「タイムマネジメント」の意識化を図る。 ・様々な学校行事の統廃合やデータの整理及び有効活用を進めていくことで、実務的な業務改善を行っていく。	C	・定時退勤がなかなか難しく、確実な実施ができなかった。 ・退勤時刻を設定し声を掛け合うことで、意識が高まり、職場全体の雰囲気づくりは進んできているが、個人によって勤務時間の上限を守れていない月があった。 ・仕事の優先順位や段取りを工夫したりする「タイムマネジメント」の意識化をさらに進めるとともに、分掌事務の見直しを進めていく。 ・業務改善のための話し合いを2学期末と3学期に行い、意識と実行力の向上を図る。	B	・定時退勤日を金曜日に設定し、早めの退勤ができるようになってきた。 ・10月から1月の時間外在校等時間月平均45時間以内であった職員は、全体で55%であった。また、月平均の時間外在校等時間は42時間16分であった。さらなる削減を目指したい。また、職員間の個人差がみられたことは今後の課題である。 ・i-schoolの掲示板機能を活用して連絡したり、サーバーのデータを活用したりするなど、ちょっとした取り組みが業務改善につながってきている。これからも職員で話し合いをしながら意識向上とさらなる業務改善に努める。	B	・児童に対して細やかな対応ができているからかもしれないが、職員の健康あってこそなので、業務が削減できるところを見つけてもらいたい。 ・時間外の業務など、教育課程と職務範囲とを照らし合わせて改善していきたい。 ・個人、学年の業務が多いとは思うが、職員の健康にも影響があると思うので、もっと働き方改革をお願いしたい。
●特別支援教育の充実	○交流学級の支持的風土作り ○特別支援教育の啓発	○特別支援教育に関するアンケートにおいて、交流学級や校内における支持的風土作りが進んだと回答した教職員が90%以上になる。 ○特別支援学級の児童の学習の様子を保護者や地域の方が参観したり、参加したりする活動を毎学期に1回以上行う。	・発達障がい児の理解や自立活動に関する内容に関して研修会を行い、特別支援教育の充実につなげる。 ・障がい者への理解を深めるための人権集会を行い、特別支援教育に対する理解を求める。 ・学校だよりなどを通じて、特別支援教育に関することを保護者や地域へ発信し、特別支援教育に対する理解を求める。	B	・年度当初に全職員で特別支援学級在籍児童の特性や配慮事項等についての情報共有をおこなった。一人一人への対応について確認することで、交流学級での学級づくりに生かしていくようにした。夏季休業中に特別支援教育に関する研修会を実施した。教育センターより講師を招聘し、「すべての児童が学びやすい授業づくり」についての研修をおこなうことができた。 ・5月に全校人権集会を実施し、特別支援学級児童の生活の様子や接後していること、思い感を持っていること等について全校児童に話した。集会後は、「もっと遊ぼう、仲良くしよう。」といった児童の感想が多く見られ、特別支援学級児童への理解が少し進んだと感じる。 ・学校だよりなどを通じて、特別支援教育に関することを保護者や地域へ発信することができた。しかし、フリー参観以外での毎学期1回以上の授業公開は実際には難しいと感じた。特別学級からの連絡を発行し、日常の取り組みや環境切り替え等を積極的に発信していく方向で検討していきたい。	A	・特別支援教育に関するアンケートにおいて、交流学級や校内における支持的風土づくりに努めた（とても・だいたい）割合が100%であった。また、教育目の化を意識しながら環境整備や授業実践に努めた（とても・だいたい）割合が100%であった。 ・特別支援学級で学ぶ児童について交流学級で話す機会を設定して授業形式で行った。特別支援学級児童への理解が進んだことで、「温然とした理解」から「実感をともなった理解」へと発展しつつある。特別支援学級と交流学級の児童が、互いに積極的に声をかけあったり一緒に協力して活動したりする姿が多く見られるようになった。 ・フリー参観以外での毎学期1回以上の授業公開は難しかった。しかし、特別支援学級児童に関わる支援会議や保護者面談は適宜行うことができた。また、専門家（医療機関・SSW・SSFなど）と連携して児童支援に生かすことができた。	A	・全職員が状況把握をして聞り、保護者の支援をしていると思うが、より一層の細かい支援をお願いしたい。 ・保護者アンケートに「すべての児童が学びやすい、個に応じた授業づくりに取り組んでいます。」などの項目が欲しいと思った。

（2）本年度重点的に取り組む独自評価項目

重点取組			具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価	
評価項目	重点取組内容	成果指標 （数値目標）		進捗度 （評価）	進捗状況と見通し	達成度 （評価）	実施結果	評価	意見や提言
○学校運営協議会の推進	◎学校運営協議会で話し合いを十分に行い、活動内容や活動方法を工夫しながらコミュニティ活動の活性化を図る。	◎「諸富町が好きですか」等の調査で、肯定的な回答をした児童が80%以上。	・児童に学校運営協議会が開催する行事や地域で行われる行事への積極的な参加の呼びかけを行うとともに企画段階からの参画を促す。 ・地域の方と学習をすることで、地域の良さを知り、諸富町を好きになる児童の育成をめざす。	B	・96%の児童が「諸富町のことが好き」と回答している。地域学習や地域行事を通して、諸富町のことを知る機会が増え、故郷に誇りを持てるようになってきている。 ・学校運営委員会が発足したことにより、学校と地域が一体になって取り組みができるようになってきている。子どもが企画運営に関わる「子どもフェスタ」や夏休みの「子ども寺子屋」の実施、地域の方がゲストティーチャーになった授業等、地域を身近に感じられるようになった。今後も評価・改善しながら、より良いものにしていきたい。	A	・97%の児童が「諸富町が好きだと回答しており、各学年における地域人はまだまだ固定化しているように思う。子どもたちの成長を地域全体で見守る意識が高まっていくことを期待している。 ・児童が参加した地域行事の「子どもフェスタ」や「もろくるマーケット」では、6年生が中心となって企画して店を出したり、値付けをして販売したりして地域の活性化に貢献していた。これらの活動は地域・家庭・学校が連携して取り組んだ成果だと考える。学校運営協議会が果たした役割が大きいと考えられる。	A	・学校をより身近に感じることはできたが、関わっている地域の人はまだまだ固定化しているように思う。子どもたちの成長を地域全体で見守る意識が高まっていくことを期待している。 ・アンケートの結果は素晴らしいが、「人材活用や交流」の項目への職員の回答が今一つである。直接の人材活用や交流でなくともよいので、地域の資源をいろいろな方法で活用してもらえればと思う。 ・学校と地域で相互理解しながら、地域に根付いた活動を一地域住民として支援していきたい。
○読書活動の充実	○学力向上や豊かな心の育成のための読書週間の定着。	○「北っ子にじいろ50選」を達成した児童が70%以上になる。 ○図書室での本の貸し出し年間100冊以上を達成した児童が90%以上になる。 ○毎日読書に取り組むことができた児童が90%以上になる。	・家庭でも読書に取り組ませるために、週末に読書の宿題を出す。 ・読書ノートを活用し、本を読んだ感想等を紹介しあう機会を設ける。 ・学習のために図書室を利用したり、必要な本や辞典を教室に置いたりして、積極的に図書室を活用する。	C	・毎週末に読書の宿題を出し、家庭でも本に親しむ機会を作ることができている。 ・読書ノートや高学年の児童はタブレットPCを活用し、本を読んだ感想を紹介し合う機会を設けることができている。 ・93%の児童が「にじいろ50選や自分で選んだ本を読んでいると回答している。一方、10月末時点で「北っこにじいろ50選」を達成した児童は32%、本の貸し出し年間100冊以上を達成した児童は30%に留まっており、後期はさらに積極的に図書室を利用し、読書活動の推進に努めていく必要がある。	B	・毎週末の読書の宿題や、読書ノートの活用に継続して取り組むことができ、72%の職員が、読書活動への取り組みを積極的に行ったと回答した。 ・95%の児童が「北っ子にじいろ50選」や自分で選んだ本を読んでいると回答した。 ・1月末時点で「北っ子にじいろ50選」を達成した児童は52%、100冊達成者は77%に留まり目標を下回った。しかし、昨年度の1月末時点では「北っ子にじいろ50選」をが44%、100冊達成者が63%であったため、昨年度の割合を上回ることができた。今後も、読書活動の推進に努めていく必要がある。	B	・読み聞かせボランティアの方々もがんばっておられるので、もっともっと読書率が上がればよいと思う。 ・図書の貸出だけにではなく、調べ学習や資料の収集などで、読書の大切さを育んでいってほしい。 ・文章理解力こそが小中学校の学力の一番の基礎だと思うので、本を読むことの大切さをもっと児童に理解してほしいと思う。これも家庭との連携が必要な項目だと思う。

●・・・県共通　○・・・学校独自　◎・・・志を高める教育

5　総合評価・ 次年度への展望	・学力向上については「授業づくり」について研究を進めることができ、児童の学習意欲や学力向上へとつながった。しかし、低位の児童への支援の方法や振り返の視点がはっきりしていない等の課題が見られた。また、家庭学習への取組について、その重要性を学力向上だより や学級通信で知らせていく必要がある。 ・心の教育では、「いじめ・命に関するアンケート」や「ぽかぽかカード」が有効であった。児童相互の自尊感情を高めることや互いに認め合う雰囲気作りに繋がった。また、道徳や人権・同和教育の研修会を実施し、職員の授業づくりや人権への意識の向上につながった。 ・学校運営協議会が立ち上がり、学校と地域や保護者が連携して子どもの安全・安心を守ったり、地域の教材や人材の活用に取り組んだりすることができた。まだ、一部の人材に頼っている面があるので、次年度からは活動の範囲をより一層広げていきたい。 ・業務改善については、職員の意識向上のためにタイムマネジメントの重要性を周知していく必要がある。また、学校行事や業務の見直しを進めていくとともに、出勤、退勤時刻の適正化を図っていきたい。